第１学年音楽科学習指導案

日　時　平成１５年９月２日（火）　５校時
場　所　第２音楽室
学　級　盛岡市立城西中学校１年１組
　　（男子１７名 女子１７名　計３４名）
指導者　小原　一穂

１　題材名　「はじめての混声合唱」
（教材名）（『Ｔｏｍｏｒｒｏｗ』『明日へ』）

２　題材について
(1)学習指導要領とのかかわり
本題材は、学習指導要領［第１学年］２内容．Ａ表現(1)の中で、はじめに歌唱を対象とする事項であるア「歌詞の内容や曲想を感じ取って、**歌唱表現を工夫する**こと。」イ「曲種に応じた発声により、**言葉の表現に気を付けて**歌うこと。」とかかわりを持つ。アの**歌唱表現を工夫する**とは、〈感じ取った内容が、実際の歌唱に生きてこそ目標に迫ることができる〉という意味であろう。イの**言葉の表現に気を付けて**とは、〈アクセント、リズム、語感を音楽の流れに乗せてどう生かすかを工夫する〉ことであり、歌唱表現を学ぶ上で特に大切にしたいところである。
つぎに、エ「**声部の役割**を感じ取り、全体の響きに気を付けて合唱や合奏をすること」という事項と深くかかわっている。ここでは、混声合唱の導入として、テノールを歌う男子生徒の音の高さやその響きを聴き合い、その上に混声合唱のハーモニーを築いていくことが大事である。ただし、**声部**は必ずしも性別と一致するものではなく、〈合唱をする上での旋律的な役割〉と考えられることから、それぞれのパートが、曲の各部分での歌い方の選択により、どのような演奏上の効果が得られるのかを学ぶことが、音楽活動の楽しさを体験することにつながっていくことを常に念頭におきたい。
最後に、表現全体に共通する事項であるキ「音色、リズム、旋律、和声を含む音と音とのかかわり合い、形式などを感じ取って表現を工夫すること。」ク「速度や強弱の働きによる曲想の変化を感じ取って表現を工夫すること。」とのかかわりがある。これらのことは、教師の教材分析に基づきながら、音楽表現の流れの中で必然性を持って意識化されることが望ましい。音楽の要素に着目することは、音楽学習の鍵を握る重要なポイントであるが、要素は常に総体としての音楽（表現）に対して働いているのであり、要素のままでは喜びを感じたり、美しさを味わったりすることができないからである。
(2)題材に関する生徒の実態
小学校高学年では、学習指導要領の指導事項としてＡ表現(2)ア「歌詞の内容や楽曲の構成を理解して、それらを生かした表現の仕方を工夫すること。」イ「拍の流れやフレーズ、音の重なりや和声の響きを感じ取って演奏したり、身体表現をしたりすること。」を取り扱うことになっている。これらのことは、小学校時点で完了するものではなく、中学校の音楽学習の中でも継続して行われる重要な内容である。また、技能面においては (3)ア「呼吸及び発音の仕方を工夫して、豊かな響きのある、自然で無理のない声で歌うこと。」が求められている。
本学級の生徒は、これらの内容を十分に身に付けているとは言えないが、内容に対する示唆を与えると比較的短時間で理解し、反応することができる。また、声部に関しては、１学期末に本人の希望と判断に基づくパート分けを行い混声合唱の形態をつくったばかりである。男子生徒は、変声前の生徒が数名ソプラノに所属している。テノールは、新しいパートに興味を持ち、変声した声の高さを試しながら、音程をそろえて歌おうとしているところである。女子生徒は、発声の仕方が素直で、魅力ある合唱表現をしたいという意欲も持っている。
(3)題材に関する教材性
『Ｔｏｍｏｒｒｏｗ』（杉本竜一　作詞・作曲／橋本祥路　編曲）
○歌詞の内容と曲想が詩的な点で一致しており、イメージを形成しやすい。

○大らかな旋律に言葉を乗せレガートに歌う部分と、細かいリズムの歯切れを生かし言葉を立てて歌う部分とがあり、短い曲の中で異なった歌い方を身に付けることができる。
○ユニゾン、パートソロ、ホモフォニックな部分、オブリガートの部分があり、声部の役割に触れやすい。
○ホモフォニックな部分は、テノールの声が出やすい音域となっており、響きを聴き取りやすい。
○１番、２番ともほぼ同じ旋律の反復によってできているので、歌詞に着目したフレージングや強弱等の変化 についての工夫がしやすい。

『明日へ』（富岡博志　作詞・作曲）

○曲の開始から山場に向かって、ユニゾン～女声二部、テノールパートソロ、混声三部と形態が変化し、声部の役割や響きの違いを感じ取りやすい。
○軽快な躍動感のあるリズムと若々しい詞のニュアンスのそれぞれに視点を定めることを基にして、語感を生かした表現について学ぶことができる。
○カデンツ部分は音価の大きい音でつくられていて、混声合唱の基本的な響きが感じ取りやすい。
○合唱コンクール等への取り組みの過程に対して詞の内容が示唆を与えており、合唱そのものの完成とともに合唱をする集団としての高まりや情意面での成長が期待できる。

3　題材の目標

(1) 混声三部合唱で表現する楽しさを味わいながら、自分の声部をよりよく歌うことへの意欲がもてるようにする。
(2) 歌詞と旋律の関係や各声部の役割を理解し、曲に適した発声で歌うことができるようにする。

4　題材の評価規準

ア 混声三部合唱の響きや各声部の役割に関心をもち、生き生きと歌っている。(関心・意欲・態度)
イ 歌詞の内容や曲想を感じ取って、自分の声部の歌い方を工夫している。(感受や表現の工夫)
ウ 全体の響きを聴きながら、自分の声部を正しく歌っている。(表現の技能)

5　指導の構想

①合唱コンクールへの取り組みと並行して題材を取り扱うが、曲を覚えたり練習したりすることに終始することのないように、課題曲・自由曲を題材の目標を実現するための「教材」として扱い、１時間ごとの授業のねらいを定めて音楽活動を行うよう心がける。
②一人一人の生徒の声と表現を大事にし、恥ずかしがったり間違いを恐れたりせず、のびのびと歌うことができる雰囲気を保つようにする。
③小学校との学習の関連を図り、唐突な感じのする指示や意味の不明瞭な課題を避ける。併せて直感的な理解が得られるような手立てを取り入れた活動を工夫する。
④『Ｔｏｍｏｒｒｏｗ』では、ポップスの要素を持つスタイルの利点を取り入れ、心地よい気分の中で旋律を歌い進むようにする。但し、形態が合唱であることから、響きのある発声が必要であることを理解させるようにする。
⑤『明日へ』では、特徴的なリズムと歌詞のアクセントを生かした表現を工夫する場を意図的に設けて、その後の歌唱活動への視点がもてるようにする。

6　題材の指導・評価計画（本時３／６）

第１時『Ｔｏｍｏｒｒｏｗ』の各声部の旋律を聴いて、自分の声部を正しく歌うようにする。
［題材の評価規準ア］
第２時『明日へ』の前半の主旋律を正しいリズムと音程で歌うようにする。［規準ウ］
第３時　リズムと言葉のアクセントを組み合わせて『明日へ』の前半を歌うようにする。［規準イ］
第４時『明日へ』の声部の役割に気付き、自分の声部の旋律を正しく歌うようにする。［規準ウ］
第５時『Ｔｏｍｏｒｒｏｗ』と『明日へ』の曲想を比較し、特徴を生かした合唱を工夫するようにする。［規準イ］
第６時 自分たちの合唱を視点を定めて聴き、実際の音に基づいてその特長や課題をまとめるようにする。［規準ア］

7．本時の学習指導

(1) 目　標

・「リズム」の主たるアクセントと「言葉」の冒頭のアクセントを音楽の流れの中で組み合わせ、『明日へ』の前半を歌うようにする。

(2) 本時の評価規準（具体の評価規準）と判断基準

評価規準 ～評価基準B～	評価場面 （方　法）	評価基準A	評価基準C	Cの生徒への支援
・リズムのアクセントと言葉のアクセントの両方を用いて歌っている。 【音楽的な感受や表現の工夫】	・課題追究Ⅱ→実際に表現の違いを確かめる場面 （観　察）	・リズムと言葉のアクセントを用い、自然な語感を生かして歌っている。	・リズムと言葉のどちらかのアクセントのみを用いて歌っている。またはどちらも用いていない。	・リズムのみの場合→単語ごとの発音練習＋助詞の意識化 ・言葉のみの場合→手拍子＋ララなどの旋律唱

(3) 展　開

学　習　活　動	＊教師のかかわり　◇具体の評価規準→◆支援
1．既習曲の歌唱 ①『Ｔｏｍｏｒｒｏｗ』を三部合唱で歌う。 ・旋律の流れに気を付けて歌う ・自分のパートを明確な音で歌い、他の声部と響きを重ねて歌う 2．学習課題の把握 ①『明日へ』（前半）の主旋律を歌う。 ②課題を把握する。	＊単旋律、ユニゾンの部分では、旋律の推進力をイメージできる言葉をかける。また、フレーズの終わりまで呼吸によって支えることができるように発声上のヒントを与える。 ＊声部が重なる部分では、自分のパートをクリアに歌えるよう、響きを集めることを意識づけるための手立てを講じる。 ＊「何拍子だろう？」 ＊「リズムを叩いてみよう」 ＊「リズムのアタマは、どこだろう？」
「リズム」のアタマと「言葉」のアタマはどんな関係になってるのだろう？	
3．課題の追究Ⅰ ①見通しを持つ。 ・「リズムのアタマは言葉のアタマになっているだろう」 ・「リズムのアタマは言葉のアタマとは限らないだろう」など ②リズムのアタマを確かめる。 ・手拍子等の身体表現や声によりその位置を確かめる ・拡大譜に印を付け、視覚的に確かめる。 ③言葉のアタマを確かめ、リズムのアタマとの関係をつかむ。 ・発音しながら言葉のアタマを捉える ・拡大譜を用いて両者の関係をつかむ	＊本時は、形式上のアクセントと表現上のアクセントのずれを基に表現の多様性に気付くことを主眼としているので、理解をすっきりとさせるため「アタマ」という言い方をし、リズム及び言葉の「始め」を問題とする。 ＊リズムの「アタマ」の意味が飲み込めない場合には、「反復されるリズムの始めの音」であることを説明する。 ＊身体から音を発することで、グルーピングされたリズムを感覚的に理解する段階を大切に扱う。 ＊感覚的に捉えた内容を知的にまとめる場として扱う。 ＊リズムのアタマと言葉のアタマとは必ずしも一致しないものの、原則的には言葉に沿って旋律及びリズムがつくられていることを踏まえた上で、そうでない場合もあることを押さえるようにする。
4．課題の追究Ⅱ ①新たな課題に気付く。 「リズム」と「言葉」のアタマが一致していないときはどう歌ったらいいのだろう？ ②考えを出し合い、実際に歌いながら表現の違いを感じ取る。 ③自分の気に入った表現を見付けたり、その理由を述べ合う。 ・「ノリがよくなるから全部リズムアタマがいい。」 ・「歌詞が伝わりやすいから言葉アタマがいい。」	＊課題の追究Ⅰで捉えたリズムと言葉の関係から、実際の音楽表現の可能性を探っていく経験を「音楽活動」と考えている。すなわち、正解を求めるのではなく、いろいろな歌い方を試してみることを重視することとする。 ◇リズムと言葉の両方のアクセントを用いて歌っている。 （音楽的な感受や表現の工夫） ◆リズムのみの生徒→単語読み＋助詞の意識化 言葉のみの生徒→手拍子＋旋律唱（ララなど） ＊気に入っているかどうかは個人個人の感じ方に由るところであり、そこに音楽表現の幅広さがあることを認め合いたい。その上で、言葉を重視した表現の素晴らしさに気付かせたい。
5．本時のまとめ ①学習したことをもとに、前半の主旋律を歌う。 ②教師の評価を聞く。	＊アクセント等の構成要素は意識しながらも最後は自然な語感が音楽の流れの中で生きることが最も大事であることを忘れないようにしたい。

unis.

mf

あ お ー い か ぜ ー に ふ か ー れ て ー
の ぼ ー る あ さ ー ひ み つ ー め て ー

mf

div.

あ し ー た お も ー う ぼ く ー ら が い ー る は る ー か
い ま ー を は し ー る ぼ く ー ら が い ー る た と ー え

な か ー ぜ を う ー け て ー
ど ん ー な と き ー で も ー

こ こ ー ろ ふ る ー え
も え ー る お も ー い

cresc.

f

あ つ ー く も え ー る ど こ ー ま で い け る ー か わ か
わ す ー れ な い ー よ ど こ ど ー く や ー ふ あ ー ん を ー

cresc.

f

cresc.

f

mp

ら な い け ど ー ぼ く ら は ー は し り ー だ す
の り こ え て ー ぼ く ら は ー お ー と ー な に

mp

mp

cresc.

f

あ し ー た へ そ う さ は て な く つ づ く み ち を い く
な っ て ー ゆ く は る か と き の な が れ を こ え て い く

cresc.

f

cresc.

f